

ホジエン族のイマカン（英雄叙事詩）について

于 晓 飛

まえがき

中国黒龍江省最北のアムール川、ウスリーリー川、松花江流域には、中国で最も少数の民族ホジエン族がいる。彼らは文字を持たず、伝承により文化を伝えていた。ホジエン族の口承文芸の中で、謡を織り交ぜて語られる叙事詩「イマカン」は、ホジエン族の老若男女に非常に愛好されていた。以前では、ホジエン族の唯一の娯楽であり、民衆に支えられることにより高い芸術性を達成したものと思われる。本稿では、イマカンの構成要素、語り方、芸術性について述べる。

一 ホジエン族と口承文芸

1 ホジエン族

ホジエン族（赫哲族）の人口は1990年4,245人で、その内1,590人が、黒龍江省内松花江下流、アムール川の南側、ウスリーリー川の西側に住んでおり、主要な村は同江県街津口の八岔

2 口承文芸

ホジエン族に伝わる口承文芸には、イマカン、タルング、シヨフリ、ジアリンクがある。

イマカンは、英雄叙事詩で、語りの中に謡がはいる。モルゲン（英雄）やアジエン（首領）がクオリ（神鷹）に変身する女性に助けられて敵や仇を討つ物語、狐仙の物語、シャーマンの

（バツア）赫哲族鄉と饒河（ラオハ）県四排赫哲族鄉である。ロシア側に住むホジエン族はナーナイ族と呼ばれ、人口約15,000人である。筆者は、2000年8月にハルビン市、佳木斯市郊外の傲其赫哲族鄉、同江県、街津口赫哲族鄉、八岔赫哲族鄉、饒河県、四排赫哲族鄉の8箇所のホジエン族を訪れ調査した。

30人のホジエン人に会ったところ、ホジエン語を話せる人は19人であった。話せる人の年齢は60歳以上であり、この内11人が、日常用語の80%位の単語を思い出せる。イマカンを語り謡える人は、一人であった。

物語である。タルングは、伝説物語であるが、謡はついていない。民族生活の百科事典として、多くの神話と自然現象の由来説を伝えている。ホジエン族の起源、英雄伝説、反抗闘争史、地方の文物、名所旧跡、風俗習慣、社会生活、世間の人情と人間関係を記録している。英雄伝説は、イマカンと共に通の主人公似たような筋を持つ。ショフリは、ホジエン族の民間物語で子供向けの語りを含む。短いが快活で、楽観的で、ユーモアがあり、好嫌をはつきりしている。正義と邪悪、貧乏人と金持ちの戦いを記録し、民族的なモルゲン（英雄）、シャーマンと漁業狩猟の人たちを詠つた。さらに、庶民を搾取する漁主（網元）、山主（山の持ち主）と侵略者をひどく嫌つた。当時の庶民の思想感情を表している。内容は、神話（アンドリ・ショフリ）、動物由来譚、英雄譚、シャーマンに関する話、漁業狩猟に関する話、日常生活に関する話、婚姻譚、笑話、短編物語などに分けられる。ジアリンクは、民謡で、ホジエン族の心情を謡にしている。その曲調は、波の揺れ、船の振動、スキーの走りなどを基にしている。即興性も有り、長短自由で、謡い方にきまりはない。内容は、古歌、シャーマン歌、漁歌と獵歌、悲歌と喜歌、恋歌、物語歌、子守唄などである。

ニ イマカンについて

イマカン（伊瑪堪）は、ホジエン族の口承文芸の中で、内容

が最も豊富かつ複雑で、民族特色が濃く、老若男女を問わず多くの人に喜んで聞かれていた。長編のイマカンには「マントウ・モルゲン」、「シルダル・モルゲン」等があり、漢語訳では長さ15万字位、語り謡うと10数時間～20数時間かかる。1930年から2000年の約70年間に、整理発表された長篇のイマカンは28編である。その他収録・整理されたイマカン断片とイマカン中の歌が22篇ある。「中国民間文芸研究会黒龍江分会1981-1990」「黒龍江省民間文芸家協会1998-1999」

1 イマカンの物語分類

イマカンの話の筋、人物の描写、構成から、次の3種類に分類できる。

(1) モルゲンとコリ型：超現実的で不思議な能力をもつ「モルゲン（英雄）」と強くて勇ましい神鷹「コリ」に変身できる女性を主人公とし、一緒に敵を討つ長編英雄叙事詩である。マントウ、アントウ、アガデ、シルダル、ムドリ、マンガム等のモルゲンの話がある。

(2) 伝奇物語型：性格が更に豊富多彩で、経験に富んだ超能力の男女を主人公にしている。神話伝説を基に、狐と人の友情と愛、能力のある女シャーマンが死者の国まで魂を追いかけた経験、他国を流浪していた者の成功、肉親を危機から救う話、部族間の戦争の怨みなどの歴史伝奇に基づいた話である。「ダンブ」「イーシン・シャーマン」「ナウエンバールジン・

シャーマン」等がある。

(3) 生活物語型・神聖でなく、幻想でもない日常生活を内容とした物語。主題は、時代と生活のいぶきであり、経験した現象や事件を題材とし、人と人の間の日常生活での関係（婚姻、家庭、愛情など）を話の筋としている。小イマカンの「嫁」「抗婚」（親の決めた結婚に逆らう）などは比較的後になつて出現した話である。

2 伝承方法

謡い手はイマカンを元のまま少しも変えずに謡うのではなく、謡うたびに創作を加えている。「イマカンを謡わせると、一人一人異なる」と言われるよう、イマカンの大筋、人名、主人公が何回勝ったか、何回危難に遭つたか、シャーマンに何回助けを求めたか、重要な人物は何人かだけを記憶しており、その他は謡い手の経験や性格によつて作られ、隨時装飾をして、個々のイマカンが出来上がる。イマカン伝承は、謡い手を通じて伝承される。謡い手は語りも謡も上手で聰明な人で、素晴らしい記憶力と表現能力をもち、「一度聞いたら忘れない謡い語り」と言われる。謡い手葛徳勝は謡いの家に生まれ、小さい頃からイマカンの薰陶を受けた人である。謡い手吳連貴は家庭以外の社会活動で聞いて学んだ人である。1950年代以降民間文学研究者がイマカンを採集整理し、漢語で発表した。これを見て謡つて周囲の人間に聞かせた。これは口頭伝承が文字伝承に発展したものである。例えば、1930年に初めてホジエン族の調査を

した凌純声氏が「イー・シン・シャーマン」を採録したときの状況を「ホジエン族の人が満語で書かれた『ニーシヤン・シャーマン』の手書き写本を見ながらホジエン語で語つたものを採録した。」と著書「松花江下游的赫哲族」に記している。

イマカンの特徴は、目の前にあるものを即興的に織り込んだり、細かく細かく描写したり、自分の言いたい事を言つたり、からかつたり、枝葉を付けて話したりするが、主題を決して離れない。

凌氏が1930年に採録したイマカン「ガメンジユガガ」の粗筋と、尤金良の「カント・モルゲン」の粗筋は同じで、登場人物の名前が異なる。モルゲンの名は、「アマチカ」に対して「カント」であり、女主人公の狐仙の名は、「ガメンジユ」に対して「ソラカ」である。このように、同じ話でも名前が異なる。

以上、イマカンは同じ題材でも、語るたびに異なつても、広く民衆に愛された。話の筋以上に、即興性や語り方や謡い方に芸術性があつたことが人々は何度聞いても飽きなかつた理由と思われる。また、イマカンの謡い手が、ホジエンの社会で高く評価されていたことは、自分も優れたイマカンの謡い手になりたいという人が多く、必然的に頭がよく能力のある人材を集め、イマカンの芸術性をさらに高めたものと思われる。

3 演奏の時間と場所

ホジエン族は非常にイマカンが好きである。冬の冷たい風に

犬橇に乗って數十里かかつてもイマカンを聞きに行く。十月から三月までの狩猟の時期には、毎晩野営地に戻って、必ずイマ

カンを謡い、獵に関するタルングを語る。何人かが一緒に狩猟、

漁業、採集に出かける時、露營するときもよく集まつて、イマ

カンを語る。ときには、全村の人々が一軒の家に集まり、南北

のオンドルに座り、夜通しイマカンを聞く。演唱者は普通男性であるが、専門的な謡い手ではなく、謝礼もない。昔、昼にタルングを語り、夜にイマカンを謡つたという。漁業の季節には、家に残つた老人と婦人、子供達もイマカンを聞く。物語を聞いたり謡うことは、冬の唯一の楽しみであつた。暗くて寒い冬の夜の不気味さを大勢で集まつて精神的に支えあつたと考えられる。さらに、イマカンの語り謡が芸術的な価値が高められれば、

一層娛樂として愛好されたものと思われる。

イマカンの芸術的価値が高まり、さらに他の目的で演奏されるようになつた。神様に祈るために、狩猟や漁業に獲物が多いように祈り、身の安全のために祈り謡う目的である。他人の家に客として行くと、食事の後、必ずその家の主人にいくつかの物語を語る。自分の才能を示したり、主人に感謝の気持ちを表す他に、自分の後ろに付いてきた悪魔を追い払い主人の一家に災難を及ぼさないことが目的である。冠婚葬祭の場合、必ずイマカンが語り謡われる。葬儀のときは死者の為の祈りであり、婚礼のときは新婚夫婦の幸福の祈りである。葬儀のとき特に重要で男女とも、死者の側で毎晩イマカンとタルングを語り

謡う。種種な機会に語り謡われたことは、イマカンは、広く民衆に受け入れられて生活に密着していたことを示している。

三 イマカンの構成要素

ホジエン族のイマカンが長く伝承された大きな理由は、モルゲン、コリ、神靈、妖怪などに、生き生きとした性格や特徴を与えたからである。これらの性格は、時代の民族の特徴を表わし、古代ホジエン族の人々の理想と期待が託されたものである。またシャーマン文化の民衆への浸透と民族の心理と美意識を表わしている。謡い手も、時代に民衆に合う題材を即興的に加え、優れた脚色をした。

例えば、シタ・モルゲンの筋は、概ね次の様に進行する。

姉と弟の双子がいた。父は、悪い女シャーマンに薬を飲まされ、母を殺し、姉弟を殺そうとしたが、果たせず逃げた。母は、まだ死んでいなかつたが、落胆し、姉にチンカラ、弟にシタと名づけ、自殺した。二人は、父を探しに行くと、悪い女シャーマンに殺されそうになつたが、前世で母と姉妹であったという伯母に助けられて逃げた。逃げる途中に、妖怪ウルグリに追われたが、母の形見の「灰、櫛、砥石、鏡」を「霧、林、岩山、海」に変化させて難を逃れた。一人の獵師ムドリ・モルゲンに救われ、成人した。姉は、ムドリと夫婦になり、三人はシタの故郷に戻つた。シ

タは、陰界（死者の世界）へ行き、母の魂を取り戻し、母

を蘇生させた。父と悪い女シャーマンに復讐を果たすため、西へ遠征した。神鷹コリに助けられ、目的を達成した。他の村人を連れ帰り、新しく村を作り、首領となつた。

他のイマカンも同様に、神鷹コリの助けを得て、復讐や遠征を達成する。イマカンを構成する要素は、主人公モルゲン、舞台はホジエン族の住む松花江、アムール川、ウスリ川の流域である。聞き手に身近な題材と感じさせる。

イマカンの大筋は、伝承されたままであるが、謡い手は、即興的に聴衆の興味あるものを織り込んだり、登場人物の性格を色づける様に、謡い手は優れた脚本家でもあると言える。

1 主人公モルゲン

イマカンにおいて、最も鮮明な性格を持つ登場者は、モルゲン（英雄）である。謡い手がモルゲンの特徴を創作するとき、すばらしい名前を付け、復讐という課題を与える。モルゲンは、西へ遠征し、復讐を果たし、勇武を誇示することだろう。

「モルゲン」という語の意味は、満語、モンゴル語、東ドチエ語のなどで“智”的意味である。謡い手は、独自に考え、イマカンにモルゲンの名をつけた（シャーマンと名がつく長篇イマカンも一篇ある）。“力”を象徴する名は、モルゲンに対する尊敬と崇拜の気持ちを表わし、モルゲンの非凡な力と勇敢さを

称えている。

モルゲンは、英雄であり、城主であり、シャーマンである。モルゲンが達成した西への征服の功績をたたえることは、ある時期のホジエン祖先の社会では、部落間の戦いがあつたことを描写しており、好戦的な狩猟民族の特徴を表わしていると考えられる。イマカン謡い手は、アントウ、マントウ、シャンソウ、アグディ、マルト、ゴゴサ、シルダル、モトリ、サロンなど多くの生き生きとしたモルゲンを作り出し、民族の強さを誇示した。

モルゲンの特徴は、次のようである。

①イマカン中の主人公は、ほとんど他の部落の侵略を受け、両親が死んだか連れ去られた孤児である。

②主人公モルゲンは、始めは病弱、無能、狂氣であつて、後に能力の高いシャーマンになる。

③イマカンの主人公モルゲンは、すべて美しく逞しく精悍な理想的な人に、成長する。敵と戦うときは、武器を何も持たず、相撲のような格闘技である。マンドウ・モルゲンは、「敵を抱え込み、一回り振り回し、敵を二つに裂いた」と描写されている。モルゲンの間の戦いは、先ず力の競争である。

④モルゲンは魔法の力を持つ。「アントウ・モルゲン」では、アントウは遠征途中、ある村に潜入するため、「一本の棍棒を拾つて自分の頭をたたいて、一匹の小さいミツバチに変身し、村落の中の随所に飛んだ」 黑龍江省民間文芸家協会1999：231-

(5)モルゲンの遠征途中、多くの若くて美しく、強いシャーマン能力を持つ女性に出会い、妻にする。妻たちは、遠征や復讐の大きな助けとなる。アントウ・モルゲンが遠征の途中で持つた八人の妻は、皆シャーマンの能力の強い女性であった。モドリ・モルゲンは、トタン・ダドを見て、彼女は綺麗で、シャマンの神力も強いし、必ず妻にして、私を助けてもらうことにしようという描写がある。つまり、モルゲンが大勢の妻をもらう目的は、結局、自分の復讐のためである。一夫多妻制の表現を通して、シャーマンが多く保護神を絶えず獲得することでシャーマンとしての力を増していくことを表している。

(6)妻のもらう一つの方法は、婚選びの試合に勝つことである。アガディ・モルゲンはプロポーズするために、ヘジン・シャーマンの家に行つた。ヘジン・シャーマンは彼に二つの条件を出し、できたら娘をやるといった。一つは、一本の矢で天に飛ぶ三羽の大雁を射落とすこと。一つは、三江口の中に千年生きるチヨウザメを捕まえてくること。アガディ・モルゲンはそれを成し遂げ、ヘジン・シャーマンの娘を嫁にした。[黒龍江省民文芸家協会1997: 373-508]

(7)モルゲンは遠征の途中、よく他の英雄モルゲンに出会い、戦つて、勝ち、主人公モルゲンの義兄弟になる。彼らは一緒に遠征に行く。

マンドウ・モルゲンでは、ムウニユウ・モルゲンの三人兄弟

は、義兄弟になつて、遠征の手助けをする。シャンソウ・モルゲンに負けたフロホンは、シャンソウ・モルゲンを尊敬し、義兄弟になつて、彼らはシャンソウ・モルゲンの復讐を助けるためについて行つた。[黒龍江省民間文芸家協会1997: 1-118]

2 女主人公コリ

女性が神鷹コリに変身し、モルゲンを助けることは、モルゲンの成功には欠かせない要素である。鷹崇拜は、ホジエン族だけでなく、ツウングース満州系諸民族の共通の風俗である。コリは、女性のシャーマンと神靈の象徴である。鳥は、女子の変身であり、シャーマンの能力が非常に大きくなる。英雄の敵討ちを助ける。全てのイマカンの作品において、主人公モルゲンの妻か姉妹がコリに変身し、モルゲンの西へ征討の成功的の鍵を握る。モルゲンの妻の数が多ければ、彼の力も大きくなる。彼女たちは、モルゲンと比べ、その行動が神秘的であり、超自然的で、神通力をもつ。これは当時のシャーマン崇拜をあらわし、非常に重要な意味を持つものと想像される。

現実のホジエン族のシャーマンは、占いをし、病気を治す。このことは、イマカンにも次のように描写されている。

「シルダル・モルゲン」では、スワン・ダドはシルダル・モルゲンの助けるために、妖怪と戦いに行く前に、ウンジン・ダトに言った。“私の言うことをしつかり覚えておきなさい。才

ンドルの上に樺木の皮の人形が一つ置いてある。ひとつは黒く、ひとつは白い。黒は妖怪で、白は私だ。妖怪が来たら、あなたは火をつけて、黒を南に向け、白を北に向けて木のまきの上に掛けなさい。私達が戦い始めた後に火を着けて、もし黒が出血したならば、すぐ火の中に投げなさい。それで私が勝つ。もし白が出血したならば、すぐ逃げなさい。遅れないように。【黒龍江省民間文芸家協会1999：25】ホジエン族は日常でも、占いを信じ、よく骨占いなどをする。

女性は、シャーマンになり、モルゲンの病気や傷を治す。「マルタ・モルゲン」では、「イチ・ダドは神花を持って、マルタ・モルゲンの腹に軽く置くと、傷がすぐ治つた。鼻の所に置くと、マルタはすぐに目さめた。【黒龍江省民間文芸家協会1997：342】

「シャンソウ・モルゲン」では、シャンソウ・モルゲンが重傷を負うと、エウンジン・ダドは薬を取つて、傷に塗つた。シャンソウ・モルゲンすぐに全身が軽くなり、手で触ると、傷は全然治つていた。【黒龍江省民間文芸家協会1997：158】

モルゲンが重傷を負つたり、死んだりすると、必ずコリが飛んで来る。また、戦いで危険になると必ず助けに来る。コリの戦い方法は、「一人のモルゲンの戦う最中、村の屋根から黒い一群の鷹が飛び出した。同時に、村の上空に敵のコリも數十羽飛んできた。ハジン・ダドが胸からハンカチを出して、空に投げると、百羽以上のコリになつた。両方混戦して、敵の方のダド

もハンカチを出して、それがまた百羽以上のコリになつた。【黒龍江省民間文芸家協会1999：193】これは他民族と異なり、イマカンの中では、モルゲンは地上で、コリは空で戦うと言う特徴が見られる。

3 守護神と神具

モルゲンは、単独で遠征復讐することができない。また途中必ずいくつの村を通り、大勢の敵のモルゲン、コリと戦う。怪物とも出会う。とにかく、多くの難関を突破しないと、復讐すべき敵に到達しえない。モルゲンの成功は必ず以下の守護神などの条件が必要である。

守護神は、イマカンの中では、神靈の形は見えたり見えなかつたりして、神秘なベールに覆われている。「シタ・モルゲン」では、シタの母が、守護神に子を守つてくれるよう願う部分がある。

小さい男の子は何と名乗ろう?

私は名づけて呼ぼうシタと。

女の子の名は、チンラカと呼ぼう。

ハニナ ハリラ ハレイ ハカリラ ヘレ

私の守り神が産ませた

シンビアオ・ママ、ウンバオ・マファが私に授けた。

彼らを守り大人にしてください。

あなたたち、大きくしてください。

ウンビア・マファは、子を天然痘から守る神であり、シェンビオ・ママは、子供を麻疹や風疹、伝染病から守る神である。

また、シタ・モルゲンが、育てくれたムドリ・モルゲンにおりをするため酒を願い、母の魂を連れ帰るための犬そりや神具を願うとき、必ず、守護神に願う。

彼らの神力は強く、呼ぶとすぐ来て、主人公のモルゲンを手伝う。用が終わるとさつと消える。神との共通性をもちながら、人の個性も持つことである。

神具（宝器）は、「シタ・モルゲン」では、くし、歯が細かい櫛、鏡、砥石などの宝器があつて、林、雜木林、海、岩山になつた。同様の宝器は「シルダル・モルゲン」にも現れる。

ブシュクが、またも来る。すぐに彼らの走つて行く所に追いつく。姉は、懷から髪を梳く櫛（取り出し）、髪を梳く櫛に言う

「私の母が生きている時、これを使つたから命をすくつて。姉と第二人の命を（すくつて）。私が投げたら、お前はブシュクの前に木を沢山生やしない。ブシュクがそこを走つて来られないように。」

と言い終わつて木櫛を後ろに投げた。その木櫛は一つの鬱蒼とした森を生やした。そのブシュクが来たが森の中を通ることができなくなつた。

宝器は日常品であるが、善良な人が使うと非常時に魔力を發揮して、弱者や善良な人を助けるということは、ホジエン族の

現実に対する理想であることがわかる。

4 妖怪

ホジエン族が信仰しているシャーマンには、善と悪がある。善いシャーマンは人のために魔除けをし、神の踊りをして病気を治し、将来を占う。悪いシャーマンは人の邪魔をし、病気させ、死なせる。妖怪は、悪いシャーマンである。悪いシャーマンは時には鬼になり、妖怪になり、猛獸になる。性格は残虐で、人肉を食べ、人の血を吸い、魔性を持っている。しかし具体的な描写については、彼らもまた人間性が与えられ、写実され、比較的現実のものに近い。これらは、当時の社会の真実を反映しており、空想ではないと思われる。

妖怪は悪のシャーマンからの変身であるから、妖怪は力も強く、術が優れているが、最終的に負ける。それは勸善懲惡的である。イマカンの中の悪シャーマン、つまり妖怪の形も、当時のシャーマン概念の反映である。

つまり、イマカン中のモルゲンの遠征は必ず以下の過程をもつ。

- ①出発し、いくつのホトン（村）を通り、そこのモルゲンと戦う。
- ②何人もの女性コリと結婚、また相手モルゲンと義兄弟になる。

(3) 怪獣に出遭うが勝ち、仇を討つ。

④ ホトン（村）を獲り、人を連れ、郷へ戻る。

イマカンの内容は非常に豊富であり、古代の歴史、英雄、風俗、漁獵などをすべて含んでいる。話題から見ると、部落の首领（*sjen*）と妖怪、悪魔及び他民族との大規模な戦争や衝突、民族移住の歴史、部落間の衝突、肉親の讐討ち、捕虜奴隸、漁場漁場争い、つまり当時の漁獵生活を反映したものである。作品のいたるところに凶暴性への反抗、侵略への対抗、英雄への尊敬が表われている。またイマカンの中でもとくに英雄モルゲンに関する物語が、そういうふた基本的な内容をもつていている。

四 謠の形式

語り謠い手尤金良氏は、69歳のホジエン族の老人で、彼の伯父尤貴連は、有名なイマカン謠手であった。このイマカン「シタ・モルゲン」は、尤金良が小さいとき伯父のイマカンを聞き、覚えたものであるが、完全な口承によるものでなく、漢語で書かれたメモを見ながら、ホジエン語で語り謠った物である。尤金良は、このイマカンの内容を、中国語で書いて1998年12月に発表している。全篇を語り謠うのに、六日間通算八時間弱かかった。当時このような長さであると一晩では語りきれず、数晩に分けて語られる。

彼の語り謠を聞くと、全体に渡りリズムがあり、台詞に相当

する謠いに感情が籠つており、ホジエン語が理解できなくても、感情の起伏が直接伝わってくる。謠い手は、優れた演技者であり、多くの人にイマカンが愛される要素であると思われる。

これまで、イマカンをホジエン語に翻訳し、英字や国際音声字母で表記したものは、四篇（アントウ・モルゲン、シャンソウ・モルゲン、シルダル・モルゲン、シャールン・モルゲン）ある。これらは、イマカンの語り謠いを聴いて、言葉を直接記録したものではない。言葉を聞きながら、直接言葉を写し、採録し、整理したのは、筆者がはじめてである。

イマカンは、主に語りであり、間に謠いが織り込まれる。謠い手が語り謠うとき、楽器の伴奏なく、すべて独りです。イマカンの語りの部分と謠いの部分の分け方には、一定の基準がある。一般に話の筋を述べるときに、語る。主な人物の対話は、すべて謠う。主人公が災難に会い、救援を呼ぶ、喜びや悲しみを表す、勝利するなどの場面で謠う。そのときのリズムは、それぞれ違う。年寄り、婦女、若い男性、子供などに使う謠いはすべて違い、それぞれのリズムがあつて、隨時に変化する。謠いが終わり、次の語りが始まるとき、また“アラーン”と言う。そして、物語の最後まで語りと謠いを繰り返す。長編のイマカンは、語り終えるのに10数時間以上かかるので、数晩にわたって語り謠われる。

謠いの部分

ここを通ったのを見ながつたか

ヘンフ鳥は謡で答える

登場人物の台詞に相当する謡は、感情を持つて歌われ、悲しいところは、謡い手は本当に涙を流している。聞いているものをその場面に引きずり込む。その出だしに、ハリラ・・・が謡われる。

「ハリラ」の回数は、その場の雰囲気、謡手の気分により回数は変わる。初めて出てくる謡で、カシエン・ダドがドウソン・モルゲン（シタの父）に次のように謡いかける。

「ハニナ ハリラ ハレイ ハハリラ ヘレ
ドウソン・モルゲン兄さんこんにちは、

西に行きあなたを探すこと五十年

東に行きあなたを探すこと四十年、会えなかつた。

いま、どんな風があなたを運んできたのか

ハニナ ハリラ ハレイ ハハリラ ヘレ

私たち二人は、前世で夫婦だつた。

ハニナ ハリラ ハレイ ハハリラ ヘレ

また、カッコウ鳥に謡いかけるときは、カッコウに変わり、ヘンフ鳥に謡いかけるときは、ヘンフに変わる。死者の国へ行く途中に住むヘンフという鳥に母の消息を尋ねるときは、次のように変形され謡われる。

ハリラ ハリラ ハリララ ハリラ ヘンフ ヘンフ

あなたは、ここで何年鳴いている

女の鬼（死者）が染を引きずり、縄を引きずり

イマカンの謡の出だしには、一定の謡詞リフレインがあり、それらは謡い手ごとに異なる。葛徳勝が、謡の出だしに使った言葉は、20種類ある。主に以下のものである。

今は、西の外れで泣いている。

家に、子供を残してきた。先へ行きたくない。

ハリ ヘン フラ ハリヘン フラ ヘンフ ヘンフラ

その女の鬼が通つたのを見た。一年位経つ。

1 ヘリラ ヘリラゲ ヘレー ヘリララ ヘリラー
2 ヘニナ ヘ ニナ
3 ゲゲゲゲガニア ゲガニア
4 ヘリラ レ ヘリラ ヘリラ レ ヘレ ヘレ
5 ゲガラゲガラ
6 ゲゲゲラ ゲゲゲゲラ ハレ
7 ヘリラ ヘリラゲ ガン

エヴェンキの英雄叙事詩では、登場者が各々の歌い出しを持つが、荻原2001・p.91】ホジエンの叙事詩では、変わらない。ハリラはイマカン中の謡い始まる時の慣用語で、長い謡詞に節を区別するときにも使われ、或いは、即興的に謡の中に入れる。

書面で書くと感じが薄いが、実際の語りを聞くと、筋により、感情により、表現が変わっていく。ハリラを謡う時間は、謡い手が次にどのように謡うかを考える時間にも使われている。

イマカンの韻律は、頭韻を含む部分は所々に見受けられる程度である。サハの英雄叙事詩では、行頭韻、脚韻などは30-40%ある。[同上・p.67-68] ハルハ・モンゴルの叙事詩では、

むすび

決り文句の部分だけ韻文であるが、テキスト化されたものは全文韻文となっている。[同上・p.81] イマカンに韻が少ない原因是、計画的に韻を挿入する手段がない（主に、文字がない）ことと思われる。多くの個所に韻を即興的には難しい。

聴衆は、興に乗った場面や、次のを早く語れと請求したり、合いの手を入れたりするときに、「カ！カ！カ！」という。「やあ！やあ！」とか「それでどうした！」などの意味である。今回は、聴衆がいないため、語り手が言っている。聴衆も演技と共に参加する。斎藤君子氏はナーナイでは「ケーエ！」と言う。

[斎藤君子2001：79-87]

語りの部分には、比喩、決り文句、誇張、反復、擬声など種々な手法が使用されている。また、名謡い手と言われた葛徳勝は、獵師の家の生まれで、獵師のモルゲンが主人公であるイマカンを得意とした。吳連貴は、漁師であったので、同江の河で魚をとり、そこに住む怪獣と戦うイマカンを得意とした。このように、謡い手が筋に沿って、自分の得意な部分を脚色してイマカンを謡つた。

イマカンがホジエン族の民衆に広く親しまわれた要因は、イマカンの内容と同等に、演出にあり、聴衆は何度聞いても飽きなかつたものと思われる。

参考文献

- 凌純声1934年・「松花江下游的赫哲族」上海文芸出版社
徐昌翰、黃任遠1989年・「赫哲族文学」北方文芸出版社
中国民間文芸研究会黒龍江分會1981-1990年・

イマカンは、ホジエン族の口承文芸の中で、最も民族特色をもち、以前、唯一の娯楽であったと考えられる。主人公モルゲンは、女主人公の変身した神鷹コリに助けられながら、復讐や遠征を達成することは、ホジエン族が他民族に侵略され、弱い立場であつたことに対し、強くありたいと言う願望を表していく。ホジエン族皆の願いであつたと考えられる。死者の國から魂を取り返し、傷や病氣を治し、シャーマニズムを謳歌していることも、ホジエン族の身近な日常生活を写していた。昔多くのホジエン族に支えられ芸術性を高めたイマカンが、1980年の調査時点であまり語られなくなつた原因は、教育が進み、他の文化を知り、生活の変わり、イマカンの内容に近親感を抱かなくなり、イマカンから興味が薄れたことが原因と思われる。このようないまカンには、昔のホジエン族の風俗習慣が満ち溢れていることを考慮すると、イマカンの保存は、大きな意義がある。

「黒龍江民間文学」第1集²³集

黃任遠編著 1992年：「赫哲族風俗誌」（民族文庫15）中央民族学院出版

荻原眞子 1989年：「民族と文化の系譜」、東北アジアの民族
の歴史、民族の世界史3、図書印刷

pp53-124

荻原眞子2001年：「ユーラシア諸民族の叙事詩研究（1）

「テキストの梗概と解説」研究プロジェクト

報告、

千葉大学大学院社会文化科学研究所

斎藤君子 2001年 「ツングース系民族の語り」 pp.79-87

黒龍江省民間文芸家協会

1998定 『伊瑪堪』（上）、黒龍江人民出版社

1999定 『伊瑪堪』（下）、黒龍江人民出版社

（ウ・ギヨウヒ／千葉大学大学院）